

財団だより

多摩川

1997. 3 第73号



トカゲ (トカゲ科)

乾燥した草地に多い。体のわきの黒線が尾までのびている。体は緑色に光り美しい。子供は背中に5本の縦すじがある。ミミズなどを食う。
16~21cm



'96年12月1日 実施された「多摩川の橋“見る・聞く・歩く”親子の会」

■多摩川現風景■

(29) ウォークラリー

「多摩川の橋“見る・聞く・歩く”親子の会」が昨年、12月1日におこなわれた。

多摩川中流部の多摩川原橋と稲城大橋とを結んだコースでのウォークラリーである。多摩川中流部では、一昨年5月に稲城大橋が有料道路として営業を開始している。

現在、多摩川の右岸と左岸をつなぐ多摩水道橋、多摩川原橋、是政橋の三つの橋について4車線に拡幅する工事が行われている。府中四谷橋も改良工事が行われている。流域の住民の方々に橋の工事のことをよりよく知ってもらい、理解してもらうための催しである。関係市長、議長などの列席のもと式が行われた後、一周約4Kmのラリーが始まった。約500人ほどの親子連れが寒風をもとめせず多摩川左岸を多摩川原橋から稲城大橋に向かった。この辺りでは多摩川はゆったりと蛇行しながら流れている。カモが沢山浮かんでいる。やがて、稲城大橋の歩道を渡って右岸へ渡る。稲城大橋は中央高速道と直結している。雑木林の中を親子が楽しく歩いて行く。途中には仮設トイレも設けてあり、職員がコース全体に配置され万全

を図っている。約1時間ばかり歩くと多摩川原橋に戻る。工事中の新しい橋の上を歩く。もう一つ新しく2車線の橋を造り全体で4車線の橋を造り上げる予定である。ゴールでは、川風に冷えた体に豚汁と甘酒の接待が嬉しかった。アトラクションで武蔵国府太鼓、電気通信大学の皆さんによるバンド演奏も楽しかった。橋についてのパネル展示、パンフレットの配布なども行っていた。これからもこのように流域住民に対する事業の情報公開と理解を求める姿勢が望ましい。

●関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

- ① 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復および利用計画に関する基礎的調査
1984年 立花直美 武蔵野美術大学 (No.73)
- ② 住民のための多摩川環境情報の利用提供システムの研究
1993年 生田 茂 都立大学 (No.151)

〈一般研究〉

- ① 橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究
1981年 石井作平 たまがわこども文化の会 (No.14)
- ② 児童・生徒の多摩川観に関する環境論的研究
1988年 山下脩二 東京学芸大学 (No.54)
- ③ 児童・生徒・市民のための多摩川観察ガイドの調査研究
1989年 島村勇二 聖徳大学 (No.65)

多摩川散歩

■福生の自然ガイドマップ-河原の生き物編-

■福生市文化財マップ■

福生市郷土資料室

この「自然ガイドマップ-河原の生き物編-」と「福生市文化財マップ」は、市内の河原の自然観察に関する情報と史跡をはじめとする文化財探訪の情報をふんだんに掲載したマップです。

福生市では1975年から市内の文化財及び天然記念物を保護するために、歴史史料、民俗資料をはじめ植物、水生生物などの分布調査を開始しました。この調査の結果、学術的に貴重なものは登録文化財や指定文化財として保護すると同時に、調査の結果は記録として保存しています。また、この記録を広く市民や研究者の方々に活用していただけるよう報告書としてまとめ、既に28集まで刊行しています。

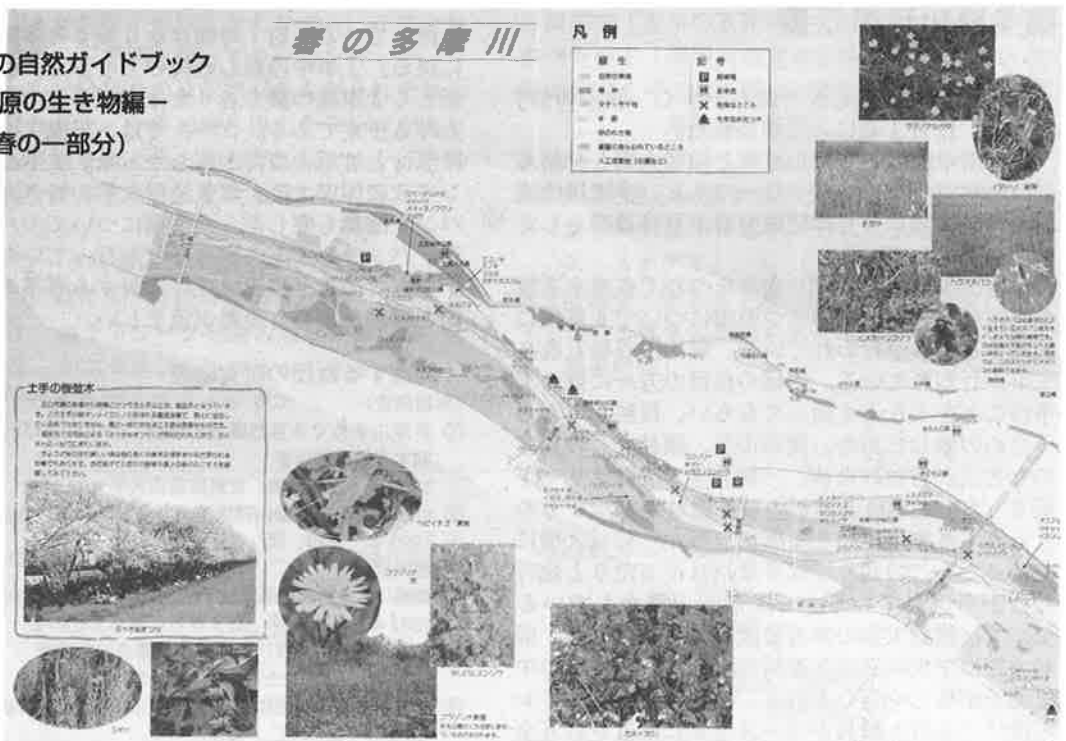
しかし、これらの報告書を片手に自然観察や文化財探訪することは困難なため、ハンディなマップの形態にして活用していただこうと今回、作成いたしました。

「自然ガイドマップ-河原の生き物編-」では、1/2500地形図の上に春夏秋冬（各季節1面、計4面）に色分けした植生図をカラーで表現し、この植生図に実際に観察できる生物を地点で示しています。観察項目は季節ごとに変化をもたせ、春と秋は植物を中心に、夏と冬は動物と地形や水系の情報を主にとりあげました。図内に書き込まれた観察項目のなかで、その季節の代表的な生物や事象については、カラー写真や図版で紹介してあります。そのほか各季節ごとにいくつかの観察ポイントのコラムとして取り上げました。また、マップには載せられなかった河原の自然観察に関する情報についてはマップ付録の解説書に「生き物リスト」などを中心に解説しました。

3枚（両面印刷）のマップ（A1・A2判）にカラー写真及び図版をふんだんに載せ、散策に携帯できるように堅牢で便利な袋に収めてあります。

- 頒価800円（郵送希望の方は代金800円の外に送料310円を加えて下さい。ただし、送料のみ切手にかえていただいても結構です。）
- 問い合わせ・送金先 福生市郷土資料室
〒197 福生市熊川850-1 (☎0425-30-1120)

福生の自然ガイドブック
-河原の生き物編-
(春の一部)



私と多摩川



'93.8.1 実施された「多摩川子ども調査隊」の水質調査
(TAMAらいふ21白書より転載)

ガールスカウト東京都支部第69団 山岸 修子

信州生まれの私は、川と言えば一番に生まれ育った故郷の千曲川をイメージしますが、多摩川へ関心を持つ大きなきっかけとなった事は、平成5年のTAMAらいふ21協会による「多摩川の復権」との出会いに始まります。このイベントは東京都と多摩地域に住む32市町村（H5当時）の市民約365万人の人々とともに、21世紀の東京を展望し、多摩新時代を先導するまちづくり運動として、多摩川を市民の身近なくらしの中に取り戻すことを目標に掲げたものでした。

青少年の育成に関わっている私は、多数のイベントの中から「多摩川子ども調査隊」「多摩川クリーンエイド」に子どもたちと一緒に参加して、水への関心を深める良いチャンスに恵まれました。

水生昆虫や、水質測定「パックテスト」は子どもたちには、水遊びを楽しみながら学べるとてもよい教材となりました。

また「クリーンエイド」と称するごみ拾いも、空き缶の多さに驚いたり、大人の捨てた物が多々あることで、大人として子どもたちに肩身の狭い思いをしたりもしました。立川の中央線鉄橋下での水質は、きれいではありませんでしたが、以前よりはきれいになったと聞きました。水の問題

題として、視野を広める事が出来ました事は言うまでもありませんが、同時に、もう少し上流ではどうなっているのか？ 拝島あたりの水質は？ その上の羽村堰ではどんなだろうか……そうだ行って見て確かめよう！ もっと調べたい、もっと知りたいと思う気持ちでいっぱいになりました。そんな折、狛江市から奥多摩湖までを歩く「リバーウォッチング」と「源流探索」のプログラムに参加する機会に恵まれました。

「源流探索」での目的地は笠取山（1,953m）の直下に位置する水干（1,865m）です。

7月下旬の当日、登山口の作場平を出発する頃には、かなり激しい雨降りになりましたが、清流に沿って涵養林を見ながら登り始めました。

どしゃ降りにも関わらず、水はさらさらとして川底をはっきりと写し、せせらぎに接する苔むした岩石は、その滴を浴びて緑鮮やかに、生き生きしています。周りの森は落葉樹林です。堆積した落ち葉はずっしりと雨水を含んでフカフカとスポンジの手触りです。以前読んだ本で「森は母である」「森林は命の工場である」と言ったアマゾンの酋長の言葉が一瞬脳裏を掠めた、いい森だ！ 母なる森とはこのような森を言うのであろうか、感激と共に本当のよい森を、雨降り故に見ることが出来たことに感謝しました。笠取山水干ではその水量の少なさに驚きながらもそれが多摩川の源流の最初の一滴であることに感銘しながら無事登山を終えました。

「林が枯れば、川も枯れる」と言われるように水源林管理は重要な仕事です。この森を日々守っている人々がいる、この登山のガイドを引受けて下さった「水道局水源管理事務所」の人々です。

雨の中解説して下さった生き生きとした笑顔が素敵でした。

いま源流地域では過疎化と高齢化を抱え、森の保全や管理その他たくさんの事が課題視されているとの事です。命を育む多摩川への思いは、小なることでは毎日使う水への感謝の気持ちと、子どもを対象に「源流の森づくりと多摩川」の環境学習を継続出来る自然体験教室を、いつの日か実現したい……と、真剣に夢を見ています。

よみがえ

甦れ！多摩川

■案内川を歩く■

一級河川である案内川は、前回ご紹介した南浅川（小仏川）と上栲田橋で合流する。高尾山の東側の山麓を流れている。大垂水峠から甲州街道（国道20号線）を縫いながら流下している。高尾駅を降りて駅前の甲州街道に出る。2キロばかり歩くと上栲田橋につく。御室橋、五月橋、落合橋、坂本橋と京王高尾線に沿って流れを遡って歩く。川の兩岸に住宅が密集しており、塩ビの排水管が兩岸のブロックの堤から何本も突き出して、盛大に生活雑排水を放出している。堤外地の1/3ほどが流れであり、1/3は草木が繁茂している。山裾を流れているので豊富な地下水の流入があるせいかわりあいきれいな水が流れている。ハクセキレイが数匹飛びまわっている。京王高尾線の鉄橋の下の川床には岩が露出して小さな渓谷の感じがする。アワのたっている濁った水の中には大きなコイがゆうゆうと泳いでいる。地元の方の手作りの「水生動物を愛しましょう」という看板が川岸に立ててある。京王線の高尾山口の駅につく。駅前広場の入口が氷川橋である。このあたりではカルガモが二三羽遊んでいる。

青葉橋、高尾橋をすぎ自然科学博物館を右手にみて新高尾橋を進む。ここでもハクセキレイが飛び交っている。羽を上げて太陽を浴びキラキラと光って飛び回っている。川の水は濁っていてコイが数匹泳いでいるのが見える。

大焚火を囲んで、太鼓をたたきながら、20人ばかりの行者が読経している。左手の山裾に響いてなかなかの迫力である。幸運にも「高尾山祈禱殿」の年に一度の護摩たきの行事に出会った。案内橋、込縄橋と進んでいく。このあたりになると案内川も甲州街道とぴったり寄り添って縫いながら流れている。流れがガードレールのすぐそばなので、道路のラインとの狭い間を歩かねばならない。大型のダンプがビュンビュンと飛ばしてくる。カーブでガードレールに避けて身をのけぞらしても、まるで自分めがけてつこんでくるようでまことに怖い。とても川を楽しみながら歩くなどといえる状態で

はない。梅の木橋、中澤橋と過ぎ、東山下橋、西山下橋あたりは集落があり、法面の崩落防止の工事が大きく行われている。

東柏木橋、西柏木橋あたりの川には、古タイヤ、こわれたバンパー、廃材、ビニール、こわれたテレビ、などありとあらゆる廃棄物が散乱している。

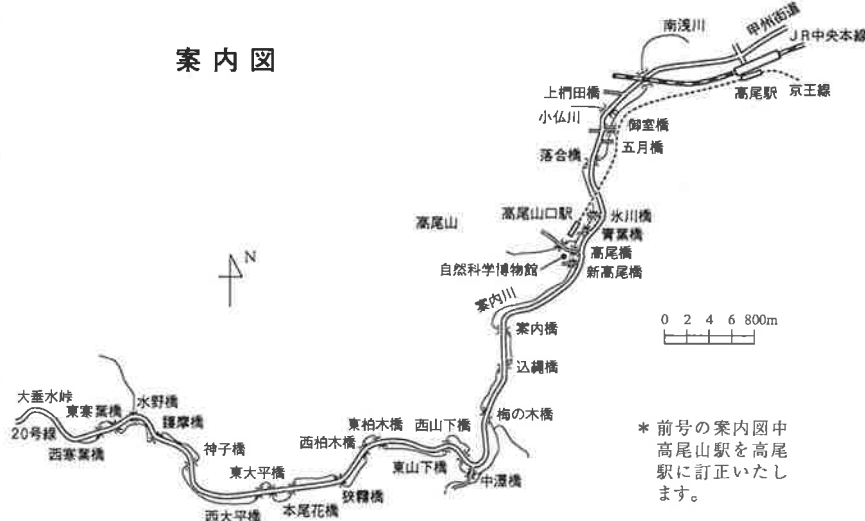
国道沿いの川はこんなものかとは思いますが、ちょっと川がかわいそうにも思える。人家が少ないので、ゴミを捨てる人もいないし、ゴミが散乱していても気になる人もいないのであろう。又、側道もないこの谷あいの川では、危険で、ゴミ拾いもできまい。モーターだけが街道ぞいに点在している風景は荒涼としたものがある。谷の両側の山がだんだんと迫ってきて、日がささなくなり陰気な感じがどんどんつのってくる。人家がないので流れがわりあいきれいなのが救いである。狭霧橋、本尾花橋、東大平橋、西大平橋と峠に向かって進んで行く。大平のバス停には、京王バスのバス路線廃止のお知らせが字もかすれて貼ってある。

91年4月から相模湖線（高尾山口駅～大垂水峠～相模湖駅）を道路渋滞、利用客減少などの理由で廃止するとのことである。もう五年前に廃線になっていたのだ。

神子橋あたりでは水量もかなりあるがゴミの散乱がひどい。護摩橋は日本橋から57キロの地点である。水野橋では案内川は細い溪流となって流れている。つたかずらが川を覆って流れがわからないほどである。東寒葉橋、西寒葉橋あたりでは路面凍結、スリップ注意の標示が冬の厳しさを思わせる。標高388メートル、ついに大垂水峠である、いつのまにか案内川は山の中に姿を消していた。

翡翠

案内図



財団からのお知らせ

〈研究助成報告書完成〉

助成集報 (24 巻) 並びに多摩川環境調査助成集 (第17巻) が完成しました。

助成集報24巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
多摩川の漁撈文化史に関する研究	安 齋 忠 雄	安齋宣伝研究室代表
多摩川流域における両生・爬虫類の分布要因の分析に関する研究	森 口 一	(財)日本蛇族学術研究所研究員
多摩川河口域の底質中での石油化学物質の微生物による分解浄化に関する研究	村 上 昭 彦	東京農工大学応用化学学科教授
アウトドア活動が渓流水質 (主にLSA) に与える影響の評価	高 田 秀 重	東京農工大学農学部環境資源学科助手
多摩川水系の低質および水棲生物中のダイオキシンの分布に関する研究	小 野 寺 祐 夫	東京理科大学薬学部講師
衛星による都市化の進展に伴う気候環境の変化に関する研究 -多摩川中流部における都市について-	山 下 脩 二	東京学芸大学教育学部教授
多摩川の支川群の類型化に関する研究	宮 村 忠	日本河川開発調査会理事

多摩川環境調査助成集第17集

研 究 課 題	代表研究者	所 属
市民の手による浅川、矢川、野川の水質合同調査と水質表現の研究	大 竹 千 代 子	国立衛生試験所研究員
多摩川における水面景観の変化に関する調査研究	島 村 勇 二	聖徳大学短期大学部初等教育学科教授
多摩川支流の考古学的遺跡における石器石材の獲得と活用について-野川、仙川、大栗川、乞田川流域を中心として-	比 田 井 民 子	東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員
多摩川のヤナギ林の発達と衰退を通して河川環境を考える	秋 山 好 則	都立武蔵丘高校教諭
多摩川における散乱ごみの状況とその対策に関する検討	鈴 木 徹 也	ANSER in たま
多摩川流域および周辺地域の文化的遺産としての古井戸に関する研究	角 田 清 美	都立小川高校教諭
多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究	久 保 田 繁 男	西多摩昆虫同好会代表
伊奈石の採石・加工と多摩川流域の流通についての研究	十 菱 駿 武	山梨学院大学考古学研究室教授

▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

- ・「身近な川の一斉調査報告書 1993～1995」
発行 みずとみどり研究会
TEL 0423-27-3169

この報告書は、1989年、「小金井の環境をよくする連絡会」が東京・多摩地区の環境団体、個人に呼びかけて18河川の調査を始めたのがきっかけで、毎年6月に行われている最近の調査

報告書である。バックテストを用いた測定の実業活動のなかに行政の枠を越えたネットワークによる環境問題についての共通認識の芽生えが見られる。今回の調査の特筆すべきことは韓国、中国の地方河川の調査の事例が含まれていること、パソコン通信をもちいてアメリカ国内の世界河川環境教育ネットワークGREEN (Global RIVERS Environmental Education Network) にも調査内容が発信され、注目されているなど国際的な広がりをもってきたことである。

多摩ルネサンスシンポジウムに参加して

1984年から毎年行われ、今回は第13回になる。多摩川流域には70を超す大学が集まっており、見方によれば日本のシリコンバレーともいえる地域でもある。この地域の大学が一堂に会して多摩地域の科学技術の振興のための研究活動を発表し、議論し、提案する催しが当番大学を会場として行われている。今回の全体テーマは「持続可能な生産社会－これからの“ものづくり”、“まちづくり”、“ひとづくり”」である。11月16日、日野市にある東京都立科学技術大学で行われた。プログラムは開催校を代表して、磯田浩学長の挨拶があった。基調講演は、小林俊介協会会長、西沢潤一前東北大学総長により行われた。

小林氏は全体テーマにそって人類が地球環境を良好に保ちながら、生産、消費活動をいかに持続できるかを語り、21世紀への展望を示した。

西沢氏は「新産業の創成」というテーマで独創性のある技術開発が日本という技術大国をささえるものであり、資源を他国にたよる日本は諸外国の資源戦略に遅れをとられぬリーダーシップをこの面で発揮せねばならない。と述べた。

基調シンポジウムは「産学の地域協力」をテーマに座長、コーディネータの進行のもとに4人のパネリストが実際の体験を交えながら、これからの産学協力の理想像を探るの討論を行った。

午後からは分科会のシンポジウムがそれぞれの会場で行われた。今年は盛り沢山なテーマがあり参加者も多数を数えた。それぞれのセッションの内容を紹介すると次のようである。

▶ セッションA

「ネットワーク社会における持続可能都市」

第1部 解題報告 持続可能都市とは

報告1 ネットワーク社会の地域。都市像

報告2 サステナブル・コミュニティ

第2部 パネルディスカッション

▶ セッションB

「環境をまもる企業」

基調講演 環境効率革命と環境産業の将来

事例発表1 ヨーロッパにおける環境監査への対応

事例発表2 生分解性プラスチックとその応用

▶ セッションC

「これからの“ものづくり”の在り方」

－持続可能な産業体制の究明－

- 「生産立国の実践」～生産における研究開発機能をいかにしたら創造的に継続・発展させることが可能か～
- 「国際環境動態のもとでのわが国生産機能の在り方と戦略」
- 「持続可能な生産社会に対応した雇用のあり方とその具体的方策」

▶ セッションD

「環境にやさしい自動車」

- 「環境に対応する自動車の現状と課題～低公害車を中心にして～」
- 「電気自動車開発の現状と課題」
- 「環境課題に対応する自動車開発」

▶ セッションE

「水資源・水環境」

基調講演 「都市の水資源、水環境、水循環」

事例発表1 「環境調和型水景施設の概要」

事例発表2 「下水処理水の環境用水としての再利用技術と事例」

▶ セッションF

「環境にやさしい新エネルギーの貯蔵と交換」

- 「新しい太陽光発電システム～多摩地区のケース・スタディ」
- 「高効率・低EMI電力変換方式の開発」
- 「燃料と電気の有効エネルギー変換システムの開発動向」

以上

- 発行日 平成9年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03) 3400-9142
FAX (03) 3400-9141

*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125

